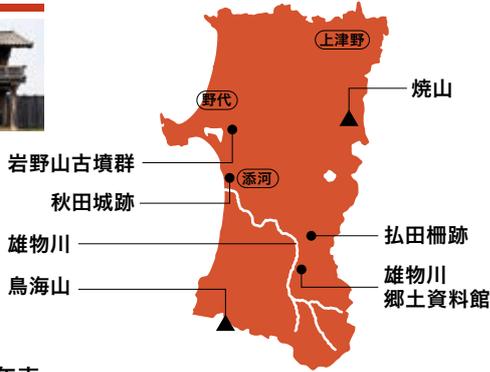


# AKITA



私田柵跡



## 元慶の乱 略年表

元慶2(878)年	3月15日	俘囚が反乱を起こし、秋田城・秋田郡家を焼く
	17日	出羽国(現在の山形県と、秋田県の北部を除く部分)、早馬で反乱勃発を上奏する
	29日	出羽国からの上奏到着、反乱の平定を命じる
	4月4日	陸奥国に援兵2000人派遣を命じる
	上旬	野代営に派遣された600人の国軍が焼山で大敗
	19日	国軍560人が俘囚軍と合戦、最上郡司・伴貞道が戦死
	21日	俘囚軍が国軍に戦いを挑み、双方に多数の戦死者を出す
	28日	上野・下野両国に援兵各1000人派遣を命じる
	5月4日	藤原保則を出羽権守、清原令望らを権官に任じる
	(不明)	「秋田河(雄物川)以北の地を己が地となさん」との俘囚軍の要求が伝えられる
	下旬	秋田城に集結した陸奥・出羽両国軍5000人が俘囚軍に攻撃されて大敗。陸奥国軍2000人が逃亡する
	6月初め	俘囚軍が秋田営を包囲し、国軍の逃亡相次ぐ
	8日	小野春風を鎮守将軍に任じ、出羽国救援を命じる
	中旬	藤原保則が出羽国に到着し詳細を把握。俘囚軍が秋田河以北に退いたため、上野国軍600人を秋田河南、添河以下3村の俘囚・良民300人を添河に配置
	28日	津軽の夷狄の脅威から、2000人の援兵派遣を要請
7月10日	保則の援兵派遣要請を拒否し、「奇策」の実施を命じる	
中旬	(愁状を提出した「賊徒」を無実と認める) 国軍に加担した「俘虜」が俘囚軍を大敗させる	
8月4日	戦勝を伝える上奏が到着する(史欠)	
中旬	国軍側に加担した俘囚が俘囚軍を大敗させる	
29日	俘囚軍300人が秋田城下で降伏する	
9月4日	戦勝を伝える上奏が到着する(史欠)	
25日	小野春風が兵470人を率い、降伏させた上津野村の俘囚長7人を従えて秋田営の北に到着	
12月10日	俘囚軍200人が甲を返還して降伏を求め、これを認める渡嶋の夷3103人と津軽の俘囚100人が帰服、慰労する	
元慶3(879)年	1月11日	出羽国から上奏が到着する
	13日	出羽国に対して新たな俘囚軍征討を命じる(史欠)
	3月2日	出羽国から俘囚征討命令の撤回を要請する上奏が到着
	5日	出羽国に対して征討命令撤回を告げる

※俘囚は律令国家に帰順した蝦夷。  
※史欠は『日本三代実録』では伝えられていない事項。

## 講師：熊田亮介氏



昭和22年、秋田県生まれ。東北大学大学院修了。新潟大学助教授、秋田大学教授などを経て、現在、秋田大学名誉教授。博士(文学)。日本古代史を専門とする。著書に『古代国家と東北』(吉川弘文館)、共著に『秋田県の歴史』(山川出版社)など。



### 秋田県の歴史 熊田亮介共著(山川出版社)

秋田の歴史を通覧する一冊。7世紀半ばに行われた「北征」から、元慶の乱へと至る古代国家と蝦夷の関係の変遷が、仔細に解説されている。



AKITA

# 秋田

第2回 第1部

## 古代秋田に轟いた 蝦夷の“独立宣言”

東北の運命を分けた元慶の乱を考える



2018.7.21(SAT)13:00

# 古代秋田に轟いた蝦夷の“独立宣言” 東北の運命を分けた元慶の乱を考える



秋田と山形の県境に源を発する雄物川。横手盆地を北上し、日本海へと注ぐ

## 1 秋田城を奪取せよ 脱朝廷を志した北の民

元慶2(878)年3月、蝦夷が蜂起し、秋田城、秋田郡家などを焼き打ちにする事件が起きた。出羽国の大地震や鳥海山の噴火など、9世紀の秋田は天災が相次ぎ、飢饉が頻発した時代である。そんな中に勃発した元慶の乱は、歴史好きであっても知る人は少ない。しかし、秋田で勃発したこの蝦夷の乱は、偶発的なものではなく、組織的で、蝦夷地と東北全域を巻き込むほどの規模であった。日本海側では最北の拠点である秋田城を奪取され、慌てふためく

朝廷に対し、反乱軍は「秋田河(雄物川)以北の地を己が地となさんと申し入れる。正に蝦夷の“独立宣言”である。北東北における蝦夷社会の実像と、崩れゆく古代律令制度の実態。元慶の乱は、それらを垣間見る歴史上の大事件である。

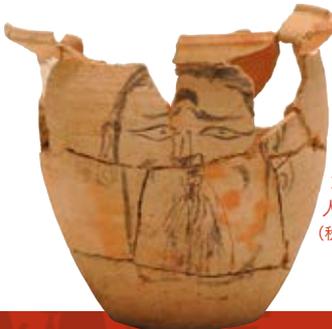
平安時代の勅撰国史『日本三代実録』。元慶2年に、秋田城などが焼き打ちにされたとある(宮内庁書陵部蔵)



## 2 元慶の乱を起こした 蝦夷とはどのような人々か

蝦夷の二文字には「蛮族」の意味が含まれる。思い描く蝦夷像も人それぞれだ。弓矢を手にし、毛皮を着た狩猟民を想像する人もいれば、アイヌ民族を想起する人もいる。だがそもそも、蝦夷は特定の人種や民族、集団などの呼称ではない。古来、公地公

秋田城跡の発掘調査で出土した人面墨書土器。描かれている人物は蝦夷だという説もある(秋田市立秋田城跡歴史資料館蔵)



蝦夷の有力者のものと推定される古墳から出土した勾玉(雄物川郷土資料館蔵)

民を基盤とする律令制の枠外にある東国の人々に朝廷が当てた呼び名である。したがって、和人もアイヌもいれば、先住民も、移入してきた人々もいた。また、蝦夷と朝廷は常に敵対していたわけではない。蝦夷は、クマやアザラシ、ラッコなどの毛皮、猛禽の尾羽といった、都では滅多に手に入らない北方の希少品をもたらす大事な交易相手でもあった。にもかかわらず、朝廷はなぜ北方の人々を蝦夷と呼び、蛮族扱いはしたのか。そこには、朝廷の政権運営と深く関わる理由があった。

## 3 元慶の乱を鎮めた 藤原保則の英断

元慶の乱は、わずか1年ほどで終息に向かう。その立役者が、出羽権守として都から派遣された藤原保則である。乱の原因は、国司の圧政にあり、それは朝廷も認めていた。しかし、時の摂政、藤原基経は蝦夷軍の壊滅を命じた。征討軍が迫る中、蝦夷軍の後ろ盾となっていた津軽の蝦夷100

人余りが、政府への服従を申し出て、事態が急変する。保則は現地の情勢を鑑み、投降を受け入れようとする。流血を見て

岩野山古墳群から出土した刀。この古墳は朝廷に従った蝦夷が被葬者と考えられている(文化の館蔵)



藤原保則(国立国会図書館 デジタルコレクションより)

は後の統治に禍根を残すと考えたのかもしれない。だが、基経

は受け入れを許さない。両者は激しく意見を戦わせ、ついには保則が押し切る。このことが、鎮圧の決定打となった。元慶の乱の後、蝦夷の蜂起はたびたび起こるが、対立を繰り返しながら、次第に北東北は中央勢力と融和していくのである。